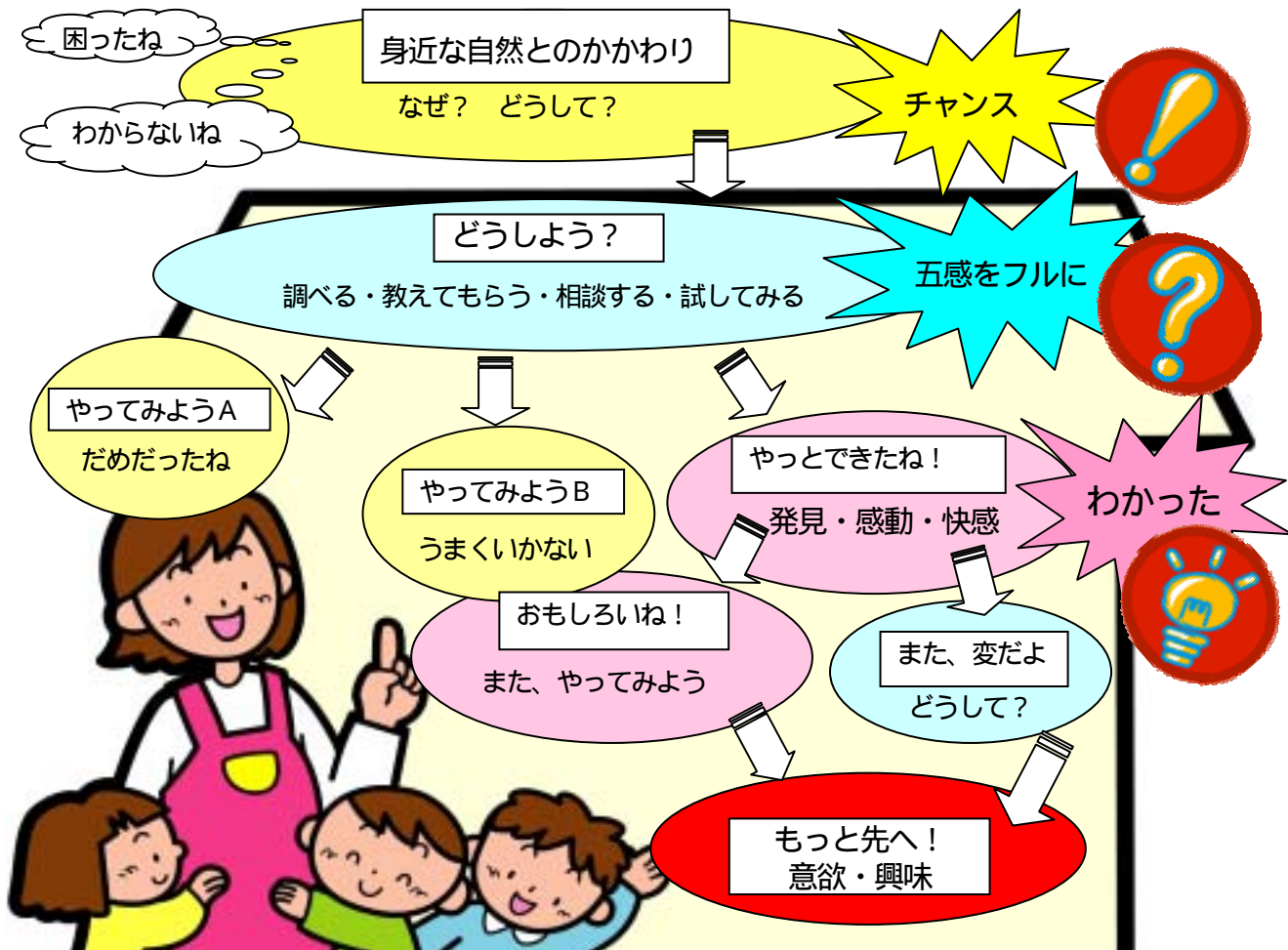


「大変だ～！イチゴが食べられている！！」～大切ないちごを、守るために～
いわき市立藤原幼稚園(福島県いわき市) [4歳児]

「科学する心」とは？ 子どもたちが身近な自然とのかかわりを通して、「なぜ?」「どうして?」などの疑問をもったときに、子どもたちと保育者がつまずきや失敗を重ねながらも、知恵を出し合い、解決の方法をさぐる実体験そのもの。



検証したいこと 困ったり、つまずいたり、失敗した経験を大切に捉え、あきらめず様々な方法を考え、やってみることで、さらに大きな発見や感動があり、「科学する心」が芽生えるのではないかと。

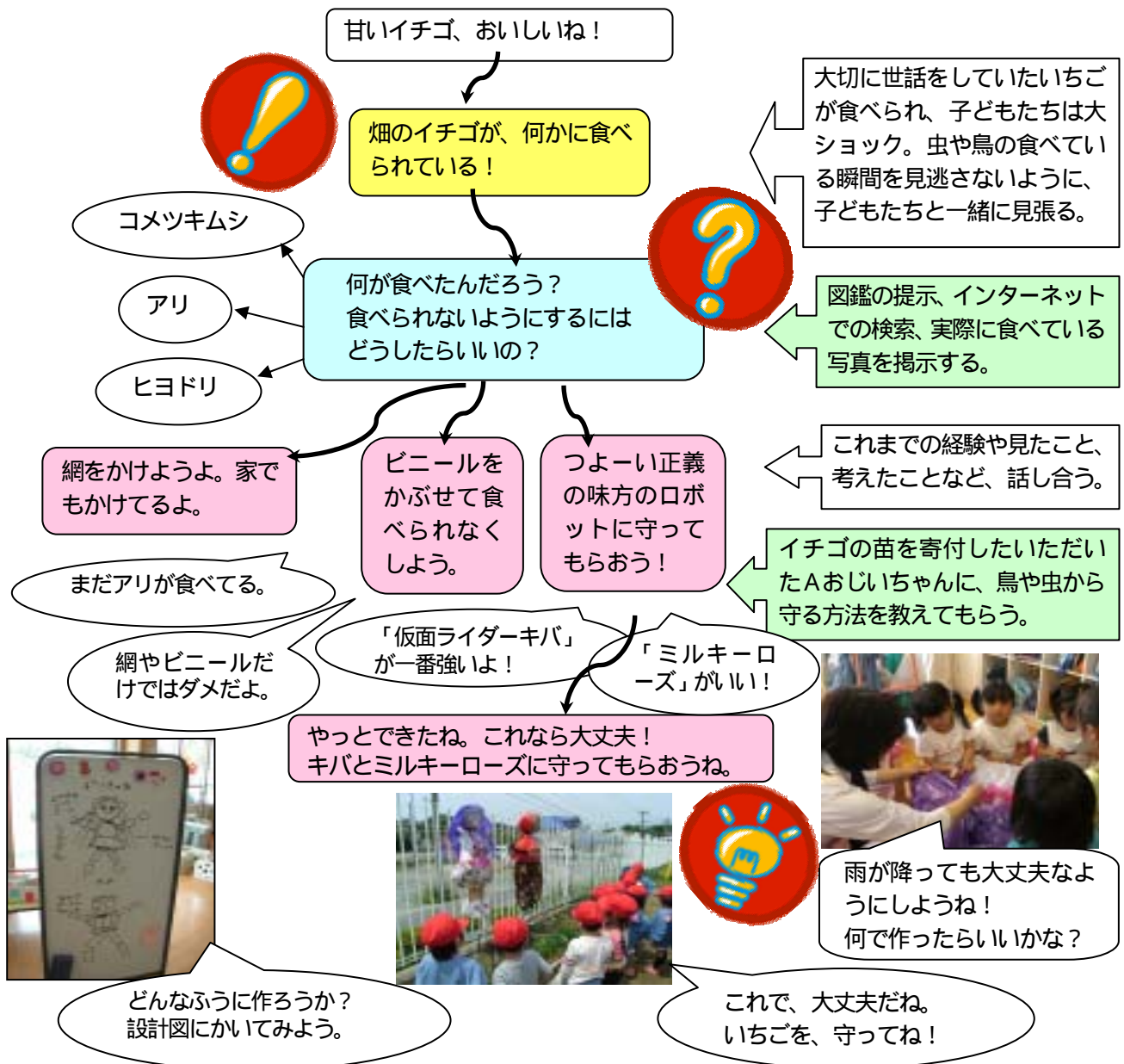
事例 大変だ～！！『イチゴ』が食べられている！！(5月)

今年は、幼稚園の畑の「イチゴ」が大豊作。
真っ赤になるのを待って、全園児で毎日
「採りたてイチゴ」を味わっていた。
ところが...



おいしいイチゴがたくさんとれたよ。
みんなで食べようね!





【考察】スーパーの綺麗なイチゴから、虫に食べられてしまうイチゴへ（自然の仕組みへの気付き）

今まで綺麗で甘いイチゴを食べていた子どもたち。自分たちで育てたイチゴは、ちょっぴり酸っぱくて小さいけれど大満足。ところがある日、自分たちの大切なイチゴが食べられていることを発見した。イチゴを守るためクラス全体で話し合い、いろいろな解決の方法を考え、試してみた。みんなで力を合わせてロボット（かし）を完成させた時は、大きな達成感を味わうことができた。この実践を通して、子どもたちは「商品（売って綺麗なもの）」としてのイチゴから、人間だけでなく鳥や虫も食べる「自然の一部としてのイチゴ」の存在に気付いた。そして、大切なイチゴを守るために、自分たちで調べ、考え、工夫していくという知性が芽生え始めた。保育者はすぐに答えを教えるのではなく、身近な自然にたっぴりかかわらせて、幼児に気付かせ考えさせることの大切さを学んだ。

<事例続きはこちらから 実践事例集 vol.6 でご紹介しています>

みどころ

「科学する心」が育まれる構造を、子どもの姿に重ねやすいように捉えているので、保育の場面で子どもたちが表す言葉や行動を丁寧に受け止めることができます。4歳児らしいイメージや発想でイチゴの事件を解決していますが、学級の共通の問題をみんなで乗り越える大きな経験になりました。園のイチゴに興味をもって積極的にかかわることで、“食べる”という環境から“守る”という、子どもたちの成長に大きな意味のある環境になっています。